
木洩れ日の下の銅貨

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木洩れ日の下の銅貨

【Nコード】

N0402H

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

ふと思いついて、誌も書いてみようと思います。中原中也や宮沢賢治などを読んで魂を振るわせたのはよい思い出です。その勢いでわかりもしないのにランボーやヘッセやリルケなども読みましたね。詩は、端的に直截的に感じた事を表現出来る反面、装飾や語彙にこだわらないとただの雑文になってしまう可能性もありますが、ともかく何作か書き残してこうと思います、学生の頃に書いたものなどを出して書き残しておこうと思います。随時追加していこうと思います。

喪失に問う

喪失に問う

やすらぐ雲の透き間から 勇気を降り注ぐ太陽が燃え滾る^{たぎ}
なのになぜ あの人はもう側にいないの

窓辺から見える河口が 情熱そのものの光を受けて煌く^き
なのになぜ 涙があふれるの

遙か彼方から 開いた窓を通り慈しむほど優しい風が吹き抜けてくる
なのになぜ 僕はうつむいているの

誰よりも 貴方を愛していたのに なぜ貴方は応えてくれなかったの
開いた手のひらから 何かがかぼれて消えた

透き間無く黒く広がる夜空に 慰めの光とともに満月が輝く
なのになぜ 僕は眠りにつけないの

活動を止めた大地が 静けさと祈りをもたらしめている
なのになぜ あの人の事を想い出してしまうの

閉じた瞳に今も 切なくあの人の姿が蘇る
なのになぜ 僕はあの人を失ってしまったの

誰よりも 大切な貴方を失ってしまった悲しみに震えている
こぼれた涙をぬぐい いつまでも喪失の意味を問い続けた

二銭銅貨 桜影

二銭銅貨

庭の苔むした倉庫に眠っている古い段ボール箱を開けた
中から歴史が埃を巻き上げながら表れた

僕は丁寧に堆積物を払い そのものを直に見ようと思う
数十年前の雑誌やモノクロトーンのアルバムなどに混じって
古い貨幣や紙幣の入っている箱を紐解いた

光の差し込まぬ倉庫を出でて醒めた水色を誇示する空の下の庭へ還る
百円札や一円札や数枚の硬貨が久々の娑婆に驚いている
その中に二銭銅貨も存在した

茶褐色にくすんだその古銭を手にとって見た
懐かしく または 輝かしい 躍動を 感じる

目を閉じると遥けく昔日のこの国の姿が見えてくるようだ
人々が 国の勃興をかけ 押並べて汗を流し生き抜いていた日々が
この銅貨に触れた人々はどれくらいいたのだろう
この銅貨で一体どんな物が買われ或いは売られたのだろう
この銅貨一枚ですら重厚な歴史を保持していると言う事実には軽い感
動を覚える

僕は ぐっと二銭銅貨を握り締め 膝に力を入れて立ち上がった

歩く 桜の咲き誇る道を 勢いを増して
進む 桜の振り散る道を 後ろも見ずに
行く 桜の散り去った道を 胸を押さえながら
走る 桜の消え去った道を 脇目も振らずに
過ぎる 桜の木の生える道を 目的の場所を目指し
避ける 桜の木だけ居る道を 戸惑い疲れながら
突っ切る 桜の木のみの寂しい道を 原点を見据えながら
倒れ去る 桜の木だけが嘆ける道で 全てを喪失して

桜影の下 新たなる力を獲得して また歩き出す

記憶の強度 喫茶店の灰皿

街角の記憶

きっと 愛していたから もう憶えていないけれども

ふと、過ぎ去った過去の記憶が呼び覚まされる
一緒に歩いた場所、キミの微笑んでいた顔

その顔を曇らせ歪ませ泣かせたのは僕だった

だから、記憶を深く深く押し込めて鍵をかけてしまった

そして、その鍵すら海の彼方に捨ててしまったから
もうキミを二度と思い出せないはずなのに

ずっと 愛していたから 忘れてなんかいなかったんだ

強く愛していたから 消えなかったんだ
でももう何も出来ない、彼方の記憶のキミよ、今幸せになってく
れているのかい？

今の僕に出来る事は キミが幸せになることを祈るだけ
キミを思い出した街角で、僕は首を振って空を見上げた

喫茶店の灰皿

地元の商店街の古ぼけた喫茶店「浪漫街道」

ちつともロマンチックじゃない煤けて薄暗い店内でコーヒーを注文した

ゆるりとマルボロに火をつけて文庫本を読み出した

ふと、目に入った灰皿に目を奪われる

白地の重量のある石つくりで、青の線で帆船が描かれておりその下に1897、from paris と書かれている

「本当か？明治時代のものじゃないか」と僕は自問した

こんながない田舎のしょぼい喫茶店の灰皿にこんな年代ものを出すのか？

が、よく読むと、その年代がその帆船の事をさしているのだとわかった

苦笑して、かつ少し安心して、吸っていた煙草を消した

なぜか胸が痛み、読書も抄らず、一時間程度でそこを出た

しばらく忙しくして、その喫茶店に行くことも無かった

数ヶ月経ったある日曜、再び暇になったのでその喫茶店に行ってみた

人通りの少ないその商店街自体になぜか一抹の不安を感じた

古ビルの階段を上がると、喫茶店は既に潰れていた

俯いて商店街を戻ると、瀬戸物屋が安売り市のようなものをしていたふと見て胸が轟いた あの灰皿が売っているではないか

僕はこれは必ず買わねばならぬ、と決心し即座にレジに向かった
失ってはならぬものを、別れた恋人を取り戻すような決意だった
たった一度、そこへ二本ほど煙草を置いただけだったのに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0402h/>

木洩れ日の下の銅貨

2010年12月4日14時35分発行